

C-41 山形県の刺子(第1報) 上杉藩士族にみられる花雑布
県立米沢女短大 徳永久

目的 刺子については 既報告「作業被服の構成と地域性の研究」のなかで一部触れ、野良着における刺子の発達経過とその特色を述べたが、本報から藩政別に 地域独自の刺子の発生のゆえんやその背景、刺子技術の特色を考察し、地域庶民の女性文化および 刺子文化の系譜の究明の一歩としたい。本報は 雑布の装飾様式を作りあげたと思われる上杉藩士族に伝承されてきた花雑布について報告する。

方法 上杉藩原方衆 即ち元下級武士を屯田させた地域や天領地からの 蒐集資料、聴取り資料、上杉藩政資料、県内各地の雑布の 蒐集資料などによる比較考察。

結果 山形県の場合、藩政別に刺子技術の昇華された対象が異り、上杉藩は花雑布、戸沢藩は祝絆纏、酒井藩は野良着、漁着、村山地区は藩主交代が多かったためか紅花商人の風呂敷、と特色がある。上杉の花雑布は 士族でありながら屯田兵として農業を営む者たちが、士族の気位を雑布に托し、小正月の花の内に玄關の足拭雑布を作ったのが始りで、形態は角から円まで様々で、刺しは多くの亀甲や三角に分割された中に刺され、二つと同じ刺しを刺さないのが厚方女衆の教養のみせどころであつたから、競つて造形的工夫がなされたと考えられる。刺しは縦横斜の目通しの基礎刺し、その目ずれによる模様刺し 更に雑布を絞る際に刺糸で古布が引きつれて切れないよう基礎刺しに糸を通し、引きつれ糸を引きあける「糸通し刺し」の二重縫いがなされ、技能と装飾を兼ねた合理的技法である。一枚の雑布に刺しへの執念をもち、女の業を競い独自の様式を作りあげた花雑布こそ女の生き甲斐ではなかつたらうか。